

# 学生主体の地域貢献

## ～香川大学博物館におけるミュージアム・レクチャーの取組～

山本珠美

はじめに

- I. プロジェクト型ミュージアム・レクチャー
  - II. 授業連携型ミュージアム・レクチャー
  - III. サークル連携型ミュージアム・レクチャー
- おわりに

はじめに

本稿は、香川大学博物館において、大学生が自ら企画・実施したミュージアム・レクチャーを事例に、学生による地域貢献のあり方について検討するものである。

香川大学博物館では、年2回の企画展のほか、原則第二土曜日に、主に小学生を対象とする無料のミュージアム・レクチャーを実施している。講師については特に規定がないものの、従来は主に香川大学の教員が担ってきた。筆者は平成23年度より副館長としてミュージアム・レクチャーの企画を担当しているが、これを大学生が企画・実施することで、学生の主体的な地域貢献活動を活発にすることができるのではないかと考えた。

その背景には学生支援GPおよび就業力育成支援GPの採択がある。平成20年度、香川大学「主体性の段階的形成支援システム（CPS）」という取組が、文部科学省「新たな社会的ニーズに対応した学生支援プログラム」（学生支援GP）に採択された。本取組は、副題を「「支援される学生」から「支援する学生」へ」としており、誰かに助けられることを受け身で待つのではなく、積極的に他者のために行動できる学生の育成を目指したものである。はじめに取り組んだのは、大学生が（さまざまな困難を抱える）大学生を助ける「ピア・サポート」であったが、支援対象をピアにとどめず地域住民へと広げて「学生の地域貢献力」を高めることも本取組の目標の一つであった。平成22年度には正課科目として全学共通科目に「キャンパスライフを考えるB～学生による地域貢献～」を新規に設け（平成23年度は「キャンパスから地域へ～市民としての役割について考える～」と名称変更）、地域社会におけるボランティア活動を単位取得要件とした授業を実施するなどしている<sup>1)</sup>。

同様に、平成22年度、文部科学省「大学生の就業力育成支援事業」（就業力育成支援GP）に採択された「学生の市民的責任感（SSR）育成システム」も、学生の地域貢献力を育てることをその取組の一つの柱としている。（なお、就業力育成支援GPは残念ながら補助金が途中で打ち切られることとなり、平成23年度末で事業は一旦中止されることとなった。）

このように、香川大学ではGP採択を契機として学生の地域貢献活動を積極的に展開する動きが進んだ。筆者は学生支援GP、就業力育成支援GPの双方に直接関わる教員としてこれらの取組を進める立場にあったのだが、教職員からの指導などなくとも自発的積極的に行動に移せる学生がいる一方で、地域貢献と

いっても教員に紹介されて出掛けるボランティア以外、「何をどうやったらいいのかわからない」という学生も少なからずいるのが現状である。地域とのつながりを全く持っていない学生が、いきなり現場に入って何かをするということは、余程の行動力の持ち主でもない限り難しい。

そこで、キャンパス内の施設を使い、既にある程度「型」が出来上がっている仕組みを活用してできる地域貢献として、大学博物館のミュージアム・レクチャーを学生主体で企画・実施することを考えた次第である。具体的には、以下の3パターンがある。

- ①ミュージアム・レクチャーのためのプロジェクト・チームを立ち上げて実施した  
「プロジェクト型ミュージアム・レクチャー」
- ②ミュージアム・レクチャーの企画・実施を授業に含めた  
「授業連携型ミュージアム・レクチャー」
- ③部活・サークルの地域貢献の一手法として実施した  
「サークル連携型ミュージアム・レクチャー」

以下、それぞれの実践について紹介する。

## I. プロジェクト型ミュージアム・レクチャー

### I-1. みんなあつまれ！わくわく大学たんけん隊（一回目）

#### (1) プロジェクト・チーム発足の経緯

大学には歴史的な遺産が残されている例が多く見られる。中には、国や地方公共団体によって指定・登録された文化財を保有する大学もある。大学の中には「キャンパスツアー」などの名称で、一般の方を対象にこれらの学内名所巡りを行っているところもある。

香川大学幸町キャンパスは、戦前の師範学校を前身とする教育学部、高等商業学校を前身とする経済学部・法学部を有するが、1945（昭和20）年7月4日の高松空襲で建物の大半が焼失してしまった。過去の写真を見ると、もし一部でも残っていたらと思わせられるのであるが、残念ながら戦前に縁のある建物は存在しない今、本学で歴史的建造物めぐりをする事は叶わない。

とはいえ、大学に何も見るべき場所がないというわけではない。香川大学では自校教育の一環として、大学教育開発センターの葛城浩一准教授を中心に、学生の手で『香川大学検定』を作るという取組を4年間に渡って進めてきた（筆者もメンバーの一員として参加した<sup>2)</sup>。その過程でキャンパス内をくまなく歩き回ったことで、歴史的価値の有無はさておき、キャンパス内に香川大学ならではのスポットを見つけることとなった。

これらのスポットを、大学生が隊長となって小学生とともにまわったら面白いのではないかというアイデアから、ミュージアム・レクチャー「みんなあつまれ！わくわく大学たんけん隊」の企画が誕生した。当企画のプロジェクト・メンバーは、『香川大学検定』編集委員の学生を中心として、彼らの友人や、筆者の授業を履修している学生に声をかけて、結成した。

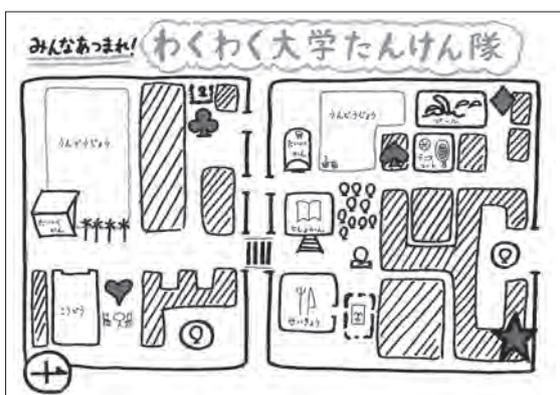
#### (2) レクチャーの概要

ミュージアム・レクチャーは2010（平成22）年5月15日（土）に実施することが決まり、3月から2週間に一度程度のペースで準備のための会合を開いた。メンバーの中に、直島で島の小学生のためのウォーク

ラリーを企画したことがある学生がいたことから、当企画もウォークラリー形式で実施することとなった。  
レクチャーの概要は、おおむね以下の通りとなった。

タイトル	みんなあつまれ！わくわく大学たんけん隊
目的	①地域の子どもたちに、遊びを通して香川大学を知ってもらう。 ②大学生に、子どもを対象とした事業を企画・実施する能力を身につけさせる。
日時	2010（平成22）年5月15日（土） 10：30～12：00
対象	小学生全学年・20名（申込多数のため、30名に増員）
会場	香川大学幸町キャンパス
担当者	教員2名 学生ボランティア10名（隊長5名、チェックポイントで待機する学生5名）
方法	ウォークラリー形式（スタート・ゴール地点は大学博物館）
ルール	■1グループ＝小学生4名（定員増のため結果的には6名）＋大学生1名とし、5グループ結成。 ①5つのチェックポイントを回り、それぞれの地点でミッションをクリアする。 ②すべてのミッションをクリアしたら、シークレットミッションが明かされるのでクリアする。 ③スタート地点に戻り、クイズに回答して、ゴールする。（答えのヒントは5つのチェックポイントに隠されている。） ④時間点（6点）＋クイズ点（10点）＋態度点（4点）の合計点で優勝グループを決める。（※態度点とは、開会式で示した「あぶないことはしない」「なかよくする」の約束を守れたかどうか、ゴール後に隊長が採点する。）
準備物	[開会式] ルール説明用紙、名札（小学生&学生ボランティア）、マジック [ウォークラリー] キャンパスマップ、デジカメ、ゴールテープ、クイズ用紙、筆記用具 [閉会式] 表彰状、優勝賞品（文房具）、結果発表用の模造紙、写真印刷用紙、プリンター
広報	大学ホームページ、チラシ配布（キャンパス周辺の小学校）、ラジオ番組（FM815）

用意したキャンパスマップは、次図の通り、表面が手書きのマップで、裏面がシークレットミッションのための仕掛けとなっている。スタート地点の第一ミッションをクリアした後に進む、ハート・ダイヤ・クローバー・スペードのそれぞれのチェックポイントでミッションをクリアすると、チェックポイントで待機している大学生から二桁の数字を教えてもらえることになっている。すべてのミッションをクリアすると携帯電話の番号になるので、その番号へ電話し（電話は隊長である大学生の携帯電話を使用）、最後のシークレットミッションが明かされる、という仕組みである。



4つのポイントをクリアすると、<sup>すうじ</sup>数字をおしえてもらえる。

080-♥♥♠♠-♦♦♣♣

すべての<sup>すうじ</sup>数字がうまったら、<sup>でんわ</sup>電話せよ！

図の★がスタート地点でありゴール地点でもある大学博物館である。それぞれのチェックポイントは、以下の通り。

マーク	場 所	ミッション
★ (スタート)	大学博物館	大学博物館の展示をよく見る。(何が展示されていたか、覚えておく。)
ハート	オープンテラス	学生サークル「メルシー笑クラブ」の学生と一緒にバルーンアートを完成させる。
クローバー	大平正芳銅像	銅像が誰であるかを学び、一緒に記念撮影をする。
ダイヤ	「吾唯足知」手水鉢	「吾唯足知」の読み方と意味、手水鉢の由来を学ぶ。
スペード	研究交流棟	中国人留学生と中国語で「じゃんけん」をして勝つ。

全てのグループがスタート地点以降に同じチェックポイントに進んでしまうと、混雑してしまうため、出発前にグループの代表者が抽選を行い、はじめにまわるチェックポイントが分散するように工夫した。

なお、シークレットミッションは、「生協へ行って、香川大学の校章の入っているお菓子（和三盆）を買ってくること」である。そのための軍資金は、事前に隊長の大学生に渡しておいた。購入した和三盆はそのまま子どもたちへの参加賞となった。

### (3) 当日の様子

当日は大変良い天気にも恵まれた。はじめに、大学博物館前のスペースで開会式を行い、ルール説明を行った(写真1)。その後、それぞれのグループに分かれて順次ミッションをクリアしていった(写真2～5はそれぞれ順に、ハート、クローバー、ダイヤ、スペード地点の様子)。キャンパス内は企画とは関係のない学生も多数いるため、小学生が見つけやすいよう、チェックポイントで待機している学生は、『香川大学検定』のキャラクターである「くうかいくん」「こんびらちゃん」のお面をつけて待機した。クリアすると<Cleared>のシールが、また、シークレットミッション終了後は<最終任務完了!>のシールが、キャンパスマップに貼られた(写真6)。スタート地点に戻ってくると、開会式を行ったスペースでクイズに回答し(写真7)、ゴールした。全てのグループが戻ってきた後、閉会式で結果発表を行い、優勝グループには優勝賞品を、参加者全員には記念品(『香川大学検定』と全員集合写真=写真8)を呈呈して、無事終了した。



写真1



写真2



写真3



写真4



写真5

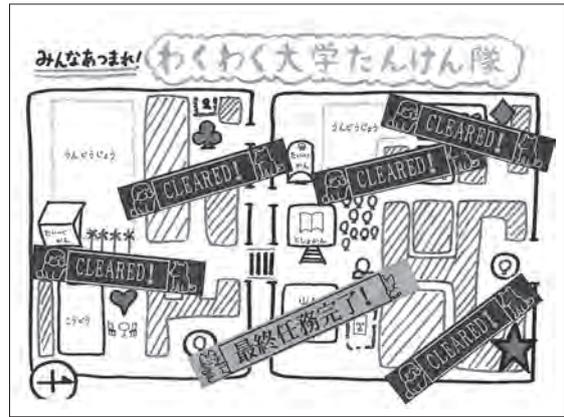


写真6



写真7



写真8

## I-2. みんなあつまれ! わくわく大学たんけん隊 (二回目)

本ミュージアム・レクチャーは定員20名のところ50名近くの申込があり、30名まで増員して実施したものの、それ以上はお断りせざるをえなかった。参加した子どもたちへのアンケート結果も上々であり、第二弾を実施することとなった。二回目は2011(平成23)年1月29日(土)となり、一回目同様、11月から2週間に一度程度のペースで準備会合を開いた。

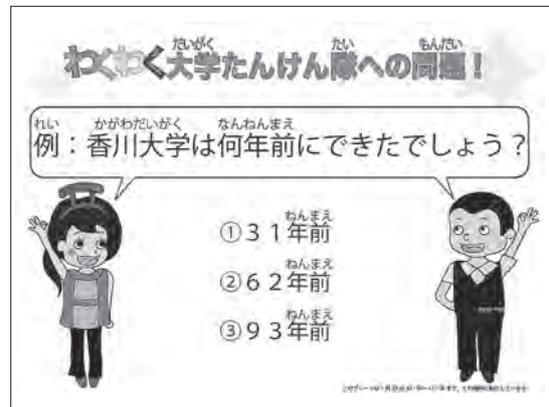
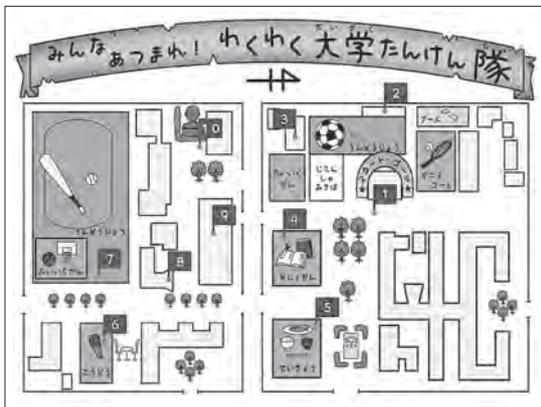
一回目の主な反省点として、①1時間半では時間が足りず、終了時刻を30分ほどオーバーしてしまっ

た、②小学生6人に大学生1人では全員に目配りできない、③グループ内での自己紹介等がなく、グループの結束が十分でなかった、④高学年がどんどん進んでしまって、低学年はただ付いていただけだった、⑤開会式・閉会式の進行に手間取ってしまった、が挙げられた。そこで、①時間を2時間とする、②グループには隊長・副隊長の2名の大学生を配置する、③ウォークラリーに出発する前に、グループでの自己紹介タイムを設ける、④対象を小学1～4年生に設定する、⑤開会式・閉会式の役割分担の明確化、という改善を施すこととなった。

さらに、リピーターの参加も促すため、ルールにも変更を加え、同じ内容にならないように配慮した。主な変更点は、以下の5点である。

- ①チェックポイントの数を増やす（5→10）かわりに、それぞれのポイントでのミッションは廃止。シークレットミッションも廃止。
- ②チェックポイントは外だけでなく、建物内も含める。
- ③それぞれのグループがチェックポイントを別々の順番でまわるよう（チェックポイントで混雑しないよう）、順序指定を書き込んだ異なるバージョンのキャンパスマップを用意する。
- ④ゴール直前のクイズは廃止。かわりに、それぞれのチェックポイントにクイズ問題を貼りだして、その場で回答しながらまわる。
- ⑤閉会式で、クイズの答え合わせをする。（一回目は結果発表のみで答え合わせはなし。）

キャンパスマップも次の左図のように大幅な改良を加えた。旗マークがチェックポイントである。旗の中の数字がまわる順番を意味しており、グループ毎に異なる。そして、それぞれのチェックポイントには、右図のようなクイズ問題（図は練習問題、実物はA3版）を目に付きやすい場所に貼った。



チェックポイントは、以下の通りである。

旗番号	場所	クイズ問題（正解は下線、下記は簡略化している）
1	研究交流棟	どこの国の留学生が一番多いか。 (地図で表示。① <u>米国</u> ②中国 ③韓国)
2	女子寮	この建物は何か。 (①寮 ②病院 ③職員室)

3	武道場	剣道、弓道、居合道、誰が剣道している人か。 (それぞれの道着を着た学生が待機。)
4	図書館	図書館の本を積み上げるとどの高さになるか。 (①サンポート ②富士山 ③飛行機の飛ぶ高さ)
5	生協食堂	食堂のうどんのメニューは何種類あるか。 (①3種類 ②6種類 ③9種類)
6	講堂	この場所は何をすところか。 (①職員会議 ②入学式 ③映画鑑賞)
7	運動場	この場所を掘っていくと地球のどの場所に出るか。 (地図で表示。①欧州 ②南米 ③豪州)
8	経済学部 (階段教室)	大学の授業は何分間か。 (①45分 ②90分 ③120分)
9	模擬法廷	この場所は何をすところか。 (①演劇 ②裁判 ③ミニコンサート)
10	大平正芳銅像	この人は誰か。 (①校長先生 ②総理大臣 ③宇宙飛行士)

インフルエンザが流行っていた時期ということもあって当日キャンセルも少なくなく、定員30名のところ20名と前回より参加者は少なかったが、一回目の問題点を改善したこともあり、スムーズに進行した。特に、閉会式で行った答え合わせタイムが大変盛り上がり、全体的な盛り上がりは一回目以上であったと感じられた。事後のアンケートでは、付き添いの保護者から「初めて足を踏み入れる教室があったり、大平元総理大臣の像があることを初めて知ったり、親にも発見があり、一緒にウォークラリーをしてとても良かったです。」「一緒にまわってくれるお兄さん、お姉さんが、面倒をよく見て下さいました。」「学生と一緒にまわってくれたので安心しました。すごく楽しんでいて、低学年にもわかりやすい問題だったので良かったです。」という評価を頂くことができた。

次の写真9は、大平銅像のチェックポイントでクイズのヒントを探す子どもの様子、写真10は全体集合写真である。



写真9



写真10

## II. 授業連携型ミュージアム・レクチャー

### II-1. 星座の物語～プラネタリウムを作ろう！～

#### (1) 教育学部「社会教育課題研究Ⅱ」

筆者が担当している教育学部社会教育主事コース科目の一つ「社会教育課題研究Ⅱ」（前期開講科目）では、「香川県社会教育史を作成する」（2009年度）、「郷土学習教材となるご当地検定を作成する」（2010年度）など、毎年テーマを決めて学生の主体的な学習を促してきた。2011年度はテーマを「大学博物館のミュージアム・レクチャーを企画・実施する」とし、7月23日（土）のミュージアム・レクチャーに向けて、準備を進めることとした。

本授業の前半は大学博物館の役割に関する筆者の講義、および、他大学の大学博物館の事例を学生が個人発表した。そして、後半で、具体的なミュージアム・レクチャーの企画および準備にとりかかった。履修学生は教育学部3年生の2名と少なかったが、彼らのアイデアにより、レクチャーの概要は以下のよう

タイトル	星座の物語～プラネタリウムを作ろう！～
目的	大学博物館で秋に開催される「小惑星探査機『はやぶさ』帰還カプセル展」を前に、子どもたちに宇宙への関心を持ってもらう。
日時	2011（平成23）年7月23日（土） 10：30～12：00
対象	小学4～6年生・20名（申込多数のため、抽選を行った）
会場	香川大学研究交流棟5階
担当者	企画・運営責任者である学生2名（「社会教育課題研究Ⅱ」履修学生） 学生ボランティア14名（子ども2名につき1名配置、ドーム担当など） （サポートとして、教員1名）
方法	クイズ形式の講義30分+実習60分
進め方	①クイズ形式で、この時期に見ることのできる星座について学習する。 ②小型プラネタリウム（写真11）を作成し、簡易ドーム（写真12）で鑑賞する。 ③早く終わった場合は、ノートパソコンにダウンロードしたプラネタリウムソフト（Stella Theater Lite）で遊ぶ。
準備物	[講義部分] パワーポイント [実習部分] プラネタリウム材料一式（型紙、電球、ソケット、電池、電池ケース、台紙）、 工作道具（キリ、セロテープ、ダンボール）、簡易ドーム（野外活動部のテント、暗幕、 暗幕を固定するクリップ、脚立） [時間が余った場合用] ノートパソコン5台（ソフトは事前にダウンロード） [事前配付] 学生ボランティアへ配付する「スタッフ用マニュアル」
広報	大学ホームページ（写真13）、チラシ配布（キャンパス周辺の小学校、写真14）

小型プラネタリウムには何種類かあるが、試作品をいくつか作って検討した結果、十二面体プラネタリウムに決定した。

写真15～16は、当日の様子である。

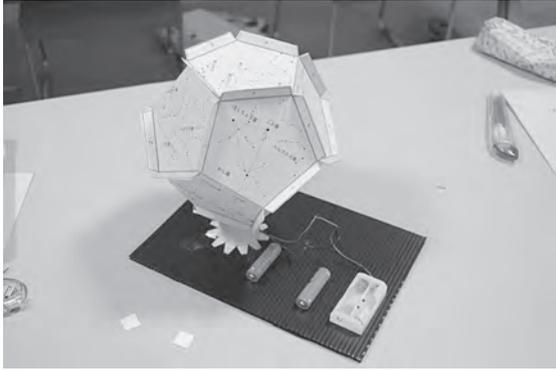


写真11



写真12 (テントの中に暗幕が張ってある)



写真13 (香川大学HPのトップページ)

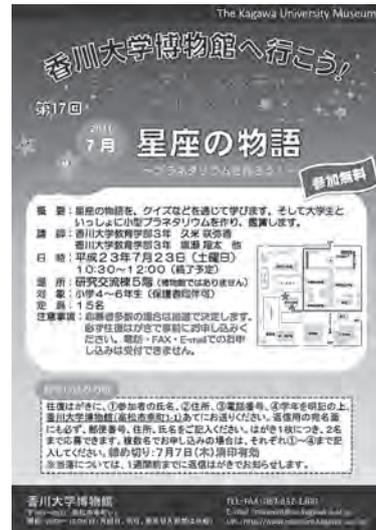


写真14



写真15



写真16

## (2) 学生は何を学んだか

ミュージアム・レクチャーを行うためには、当日90分頑張れば良いというものではない。広報期間を設けることを考えると、遅くとも1ヶ半月前までにはある程度の内容が決まっていなければならない、1ヶ月前には広報開始、2週間前までには当日お手伝いをしてくれる学生ボランティアの確定、という作業がある。並行して、講義部分のパワーポイント作成、試作品づくり、実際に作るプラネタリウムの決定、そのために必要な材料の購入や借受も必要である。大学の事務を通しての物品購入には時間がかかるため、

直前になって「実はこれも必要だ!」という事態は避けなければならない。また、暗幕のように「どこかにあるはずだから、借りよう」と思っても、果たしてそれはどこにあるのか、誰に聞けば分かるのか、借りるための手続きはどうすればよいのか、返却はどうすればよいのか、一つひとつ調べるところからはじめなければならない。

学生ボランティアの頭数が揃っても（揃えるまでも一苦労だったが）、彼らに当日どのように動いてもらうか、一人ひとりが事前にしっかりと内容を把握しておいてもらわなければならない。理想的には、スタッフ全員が一度は試作品を作って、コツをつかんでおくことが望ましい。そのための時間をいつ設定するのか。ボランティアもそれぞれ予定があるため、全員が揃う時間を見つけるのは難しい。今回、企画・運営責任者の学生は、①香川大学博物館の役割、②本ミュージアム・レクチャーの趣旨、③当日までの予定（いつ、何の準備をするか）、④当日のスケジュール（開始前、レクチャー本番、終了後）、⑤役割分担表、からなる「スタッフ用マニュアル」（7頁）を作成し、これにもとづき説明会を行った（説明会に来られなかったボランティアには、個別に対応した）。時間のあるボランティアには、当日だけではなく、事前の諸々の準備から参加してもらうようお願いした。幸いにして、何人かは準備段階からとても熱心に手伝ってくれたようである。

当日は、企画・運営責任者はレクチャー開始2時間前からリハーサルを行い、1時間前にボランティアが集合すると最終ミーティングを行った。その後、会場設営、ドームづくり、受付、大学の門から会場までの案内、それぞれの担当に分かれて、レクチャー本番を迎えた。

これが、レクチャー本番90分に到達するまでにしなければならないことである。本番のさまざまな場面を想定しながら、複数の作業を同時並行で進めなければならない。2名の企画・運営責任者である学生は、授業時間だけでは足りず、時間外にも相当な時間を費やしたそうだ。その苦労は並々ならぬものがあったようで、「社会教育課題研究Ⅱ」の期末レポートには、次のようなことが述べられている。（以下、レポートから抜粋。読みやすさを考え、文章を多少手直した。）

社会教育課題研究Ⅱを終えて

09L323 黒瀬 翔太

1. はじめに (略)

2. 講義とプレゼンテーション (略)

3. ミュージアム・レクチャーの企画と運営

ミュージアム・レクチャーの企画、実施は、大きなプレッシャーだった。(略) 今までイベントに参加したりボランティアとして運営を補佐した経験はあるものの、企画や準備、告知に至るまで、文字通り「ゼロ」からすべてを創っていくのは初めてだったからである。もし、この授業に久米さん(注:もう一人の履修学生)がいなかったら、おそらく私は多大なる重圧に押しつぶされてしまっていただろう。というより、ミュージアム・レクチャーそのものが失敗してしまっていたかもしれない。また、14名もの学生ボランティアの方々の助けがあったからこそ、今回成功をおさめることが出来たと心から思っている。授業外の時間にもかかわらず、多くの人が準備に来てくれたり、運営の補佐をしてくれた。もうあのメンバーがそろって何かをするということはないかもしれないが、もし自分に何かできることがあれば、積極的に参加、協力したいと思っている。

ミュージアム・レクチャーを通じて得られた事柄の中で最も大きかったのが、自分を変える機会を多々提供してもらえたということである。大多数の前での告知、小学生を相手にした少し「くだけた」プレゼンテーション……。これはこの講座を受講していなければ決して体験できていなかったと思う。また、学部や学年を超えた人々との交流が出来たことも、私にとってとても大きな経験だった。同学科内の友人、知人が殆どだった私にとって、違う学科、学部の先輩後輩との出会いは、とても新鮮だった。

今回、ミュージアム・レクチャーを通じて、改めて他人と関わることの大切さと、スタッフとして企画を立ち上げ、実行する楽しさを学ぶことが出来た。あの体験を通じて何か自分が変わったことが、一皮むけたということが実感できている。

4. まとめ

今回の授業は受講者2名の超少人数であり、その分担当しなければならない事柄も多かった。しかし、今では、この授業を全て自分たちで乗り切り、目標を達成したという充足感でいっぱいである。ミュージアム・レクチャーの内容については、「はやぶさ」と関連させて「宇宙」について取り上げる、といった案は早期から浮上していたものの、実施に至るまでの内容を絞り込み、イベントという形にまで作り上げるのは大変だった。また、小学生を相手にプレゼンテーションを行うことはとても難しかった。今現在、塾講師としてアルバイトをしている中で、少人数の小学生を担当することはあるものの、あのような形式で(親も同伴の中)、それもわかりやすい口調でプレゼンをするのは、今まで真面目な発表しかしたことがなかった自分にとって、最大の課題、難題であるかのように思えた。しかし、いざやってみると、下手ながらもなんとかこなすことが出来、「自分でもこんなことが出来たのか」と驚いた。参加してくれていたボランティアの友人からも「今までの黒瀬とは全く異なった一面が見られた」との感想もいただき、本当に体験してよかったな、と、今では心から思っている。

運営自体についても、うまくいかないことが多かったように思う。どれだけ先回りして計画を立てたとしても、それを超えた不測の事態の発生……。常にてんやわんやといった状態だった。前だけを見るのが精一杯で、なかなか周りを見るということまでには至っていなかったことが要因だと自己反省すると同時に、計画的かつ効果的に人を動かすということはとても難しいことも分かった。ものを教えることも同様だが、他人に伝えるためには、まずは自分が内容をしっかり押さえておく必要がある。このイベントで得た経験、知識を一度きりで終わらせるのではなく、他のイベントやボランティア活動に積極的に関わっていくことで、さらなるスキルアップを目指していきたい。

5. おわりに (略)

## 社会教育課題研究Ⅱを振り返って

09L322 久米咲弥香

I. はじめに (略)II. 大学博物館の歴史・設置について (略)III. 個人発表 (略)IV. 棟方志功展 (略)V. ミュージアム・レクチャー企画・実施

この授業で一番大変なミュージアム・レクチャーは、はやぶさと関連づけて「星座の物語」になった。決まっ  
てからは、プラネタリウムの作成キットを決めるために試作に励み、キットが決定した。キットが決定してから  
は、材料の発注やプレゼンテーションの内容を考えること、ボランティアの確保、等、一気にすることが増え、  
本当に忙しくなった。ボランティアの方々にしてもらうことについてのマニュアル文書作成、準備もあり、自分  
が指示する側というのは本当に大変だった。子どもたちにわかるようにパワーポイントを作るのは、慣れていな  
いので意外と苦戦した。また、子どもたちが暇をもてあまさないように、合間に何をするのか考えるのも必要  
で、かなり綿密に計画を立てた。フリーソフトを決めてからは、その操作をマニュアルとして作成する作業も分  
担した。テントでの観察や組み立てなども何回か繰り返し、当日のシミュレーションをした。司会もすること  
になったので、司会進行の原稿も考えた。本番前日は、遅れてきたソケットと台紙を切り、会場に移動させた。

当日は8時過ぎに到着し、ボランティアが来る前に、一度、司会とプレゼンを通して行った。時間をかなり早  
めにして準備をしていたにもかかわらず、時間が過ぎるのが早くて、自分のすべきことやボランティアの方々に  
指示することなど、本当に始まる直前までバタバタしていた。

VI. ミュージアム・レクチャーを終えての感想・反省

実際にミュージアム・レクチャーを終えて、まず一言「大変だった」と思った。当日は朝8時過ぎから準備して、  
ボランティアの遅刻等のアクシデントもあったが、準備は何とか終えることができた。先生からの課題であっ  
た、ボランティア一人ひとりとも話をして、私たちのミュージアム・レクチャーが始まった。思った以上に子  
どもたちが星座について詳しくて驚いた。

反省点は多くあるが、(略) ボランティアとの意思疎通をもう少し徹底してすべきだった。当日はボラン  
ティア全員と話すことはできたが、初めて見る方もいて、分からないままで講座が始まってしまった人もいたよ  
うで、もう少し対策をとってボランティアの方々との機会を設けるべきだった。

最後の反省点は、私たちの講座をきちんと確認すべきだったことだ。このことが一番大事で、一番重要だ  
ったにもかかわらず、最終確認を怠ったために、いくつか問題が生じてしまった。時間がおしてしまったこと。最後  
に保護者の方に球体に関して指摘を受けてしまったこと(注:組み立て方を間違えて、左右反対の鏡像が映るよ  
うに作ってしまった)。「満足して帰ってもらいたい。」と思って頑張ってきたが、悔しい思いで終わってしま  
った。もっと確認していたら、と思う。(略)

「やるからには、楽しく、子どもたちに良かったと思わせたい」という一心で、黒瀬君やボランティアと頑張  
ってきたが、反省点も多く悔しい思いだった。しかし、一人の子が、最後に紹介した博物館のチラシを持って、お  
母さんに「僕また来たい。これにも僕行きたい。」と言ってくれて、反省点は多かったが、一人でも満足して  
もらえたので、良かったと思えた。

VII. おわりに

(略) ミュージアム・レクチャーは他講義では絶対に経験することが出来ないものだった。人前で話すのが苦  
手だった私だが、本当に良い経験が出来た。自分たちで講座を考え、実際自分たちで進行するのは本当に大変  
だったが、充実した毎日だった。(略)

## II-2. 小豆島での開催

このミュージアム・レクチャーは当初1回限りのものと考えていたが、香川県教育委員会の「かがわ子ども大学」が香川大学（および高松大学、四国学院大学）に委託された関係で、二回目が実施されることとなった。

かがわ子ども大学とは、次のような取組である。「子どもや家庭の支援に関わる取り組みに地域住民の主体的な参加を促進するため、大学等の地域の知的資源を活用しながら、地域住民、社会教育団体、NPO、企業等が連携して、子どもの知的好奇心を刺激する学びや体験活動を提供する「かがわ子ども大学」を県内の大学等に委託して実施する」（「かがわ子ども大学」委託要綱より引用、下線は筆者による）。香川大学では、生涯学習教育研究センター長の清國祐二教授が企画する講座と、筆者が企画する大学博物館ミュージアム・レクチャーを、「かがわ子ども大学」として実施することとなった。

大学博物館では、小豆島の土庄町立中央公民館を会場に、2011（平成23）年11月5日から19日までの土曜日、3週間連続で、上述の「プラネタリウムを作ろう」と、副館長の伊藤文紀農学研究院教授（昆虫学）による「アリの世界」、館長の寺林優工学研究院教授（地質学）による「アンモナイト・三葉虫レプリカ制作」を実施することと決定した。（なお、「アリの世界」と「アンモナイト・三葉虫レプリカ制作」については、授業連携型による学生主体のレクチャーではなく、担当教員によるものである。）7月の「星座の物語～プラネタリウムを作ろう！～」は時間が少々足りなかったことを反省し、前半のクイズ形式の講義部分をカットし、プラネタリウム作りだけに特化して実施することにした。広報は、自治体広報誌「広報とのしょう」への掲載のほか、小豆島在住の小学生全員に学校を通してチラシ（写真17）を配付した。

「プラネタリウムを作ろう」当日は、7月のレクチャーで企画・運営責任者を務めた2名の学生とボランティア学生2名が中心となり実施した。また、「かがわ子ども大学」が地域住民との連携を趣旨としていたことから、土庄高校、土庄町ジュニア・リーダー、小豆島自然観察会へ協力を依頼し、ボランティアとしてレクチャーを補佐して頂いた。とりわけ土庄高校の高校生たちは大変熱心に参加して下さり、レクチャー成功に導いてくれた（写真18）。

写真17



写真18

### Ⅲ. サークル連携型ミュージアム・レクチャー

#### Ⅲ-1. 「大学と地域社会とのつながりに関する実態調査」から

「はじめに」において、学生支援GP・就業力育成支援GPでは学生の地域貢献力の向上を目標に掲げたことを説明したが、平成21年度および23年度には実態把握のため「大学と地域社会とのつながりに関する実態調査」を実施した。この調査は「学生調査」「教職員調査」「コミュニティセンター調査」の3部からなる。このうち「学生調査」は、学生の自主的な活動であるサークルが、活動の一環としてどのような地域貢献を行っているのかを把握するために行ったものである。香川大学の109の公認サークルにアンケート調査を実施、97団体から回答を得た。

主な結果は次の通りである<sup>3)</sup>。

- ①地域住民を対象とした活動を行っているサークル数は、97団体中29団体（30.0%）、行っていないサークルは68団体（70.0%）であり、3割のサークルしか地域社会との関わりを有していない。
- ②具体的な活動内容は、子どもたちの遊び相手、出張演奏会、イベントの参加・手伝い、病院でのボランティア活動、スポーツ大会の補助などである。サークル活動の内容に即したものがほとんどであり、普段の活動の延長として地域社会へフィールドを広げているようである。
- ③地域活動を行っている団体は、費用や人材といったリソース不足を感じているものの、活動に対しては「やりがい」「喜び」を感じており、好意的な意見が多く見られる。
- ④地域活動を行っていない団体は、地域社会から依頼があれば対応したい、地域活動の必要性を感じているなど、活動に対して前向きな意見を持つ団体が多い。

ここで注目したいのは④の「活動をしていない団体」の意見である。前向きな意見が多い反面、「今までやったことがないので、どういう風にやればよいのか知りたい」「具体的に何をしたら良いかわからない」など、一歩をどうやって踏み出せば良いのか分からないという声も、少なからず見られるのである。

そこで、具体的な方法論の提示が必要と考え、今までこのような地域貢献の経験がないサークルに依頼して、ミュージアム・レクチャーを企画することとした。

#### Ⅲ-2. マンドリンの魅力

大学博物館のミュージアム・レクチャーであることを考えると、内容は小学生が普段の学校生活では体験しないものであることが望ましい。条件にあう団体としてマンドリンクラブにレクチャー開催を依頼したところ、快諾していただいた。8月から筆者がクラブ部長と数回の話し合いを重ね、概要は以下の通りとなった。

タイトル	マンドリンの魅力
目的	①大学生に、サークル活動を通じての地域貢献の方法を身につけさせる。 ②地域の子どもたちに、小学校では触れる機会の少ない「マンドリン」という楽器について知ってもらう。
日時	2011（平成23）年10月8日（土） 10：30～11：30
対象	小学4～6年生・15名（実際の参加者は3名）
会場	香川大学博物館
担当者	香川大学マンドリンクラブの学生3名（+サポート教員1名）
方法	講義20分+実習40分
進め方	①マンドリンとはどのような特徴を持つ楽器であるか、学習する。 ②マンドリンオーケストラの演奏をDVDで視聴したのち、担当学生による簡単なアンサンブル演奏を聴く（写真19）。演奏曲はスタジオ・ジブリから。 ③マンツーマンでマンドリン演奏の基礎を学び、アンサンブル演奏を行う（写真20）。
準備物	[講義部分] DVD（マンドリンオーケストラ） [実習部分] 大学生が使用するマンドリン+小学生が使用するマンドリン
広報	大学ホームページ、チラシ配布（キャンパス周辺の小学校）

3連休の最初の土曜日だったせいか、募集人数15名に対し3名しか参加申込がなかったのは残念だった。しかし、その分、マンツーマンでじっくりとマンドリン演奏を学ぶことができ、子どもたちは満足だったようである。3名ともマンドリンを触ったことは初めてだったにもかかわらず、短時間で音階をマスターし、さらに「かえるの歌」のアンサンブルにまで到達したことは、驚きであった。



写真19



写真20

## おわりに

本稿では、平成22-23年度にかけて実施した、学生主体のミュージアム・レクチャーについて紹介した。これらはまだ試行段階であり、また、筆者の個人的な取組にすぎない。今後これをどのように組織化、ルーティン化していくかが課題である。時にプロジェクト・チームを組んで、あるいは授業を通して、サークル活動の一環として、大学博物館を拠点に学生の主体的な地域貢献活動が広がっていくことを願う。

ている。

職業人として「子どもに何かを教える」のは教員など一部職業に就く学生に限られるが、地域住民の一員としてであれば、子ども会などの団体活動を通して地域の子どもと関わることは多くの学生の将来に待ち受けているであろう。近年、「新しい公共」が唱えられ、地域課題を地域住民が自ら汗を流し解決していくことが望まれている。学生主体のミュージアム・レクチャーの取組が、そのための一歩となれば幸いである。

#### [注]

- 1) 学生支援GPの取組の具体的成果については、『中間成果報告書』『最終成果報告書』を参照のこと（香川大学教育・学生支援機構編2010、および2012）。また、大学生と地域社会との関わりの変遷について、山本（2011）もあわせて参照されたい。
- 2) 『香川大学検定』は、現在までに、2009年版、2010年版、2011年版、2012年版が冊子体として刊行されている。ウェブサイトは<http://cps.ca.kagawa-u.ac.jp/kentei/index.html>である。本取組については、葛城編（2012）を参照のこと。
- 3) 詳しい結果は、香川大学教育・学生支援機構（2011、pp.9-24）を参照のこと。

#### [参考文献]

- 香川大学教育・学生支援機構編『香川大学学生支援GP主体性の段階的形成支援システム（CPS）―「支援される学生」から「支援する学生」へ―中間成果報告書』2010年
- 香川大学教育・学生支援機構編『大学と地域社会とのつながりに関する実態調査報告書』2011年
- 香川大学教育・学生支援機構編『香川大学学生支援GP主体性の段階的形成支援システム（CPS）―「支援される学生」から「支援する学生」へ―最終成果報告書』2012年
- 葛城浩一編『「香川大学検定」を用いた自校教育の実践記録』香川大学教育・学生支援機構、2012年
- 山本珠美「ピア・サポートからピアを超えた関係づくりへ」、加野芳正・葛城浩一編『学生による学生支援活動の現状と課題（高等教育研究叢書112）』広島大学高等教育研究開発センター、2011年